



【絶対信仰に生きる一年】

説教者: 鄭南哲牧師

聖書本文: エステル記4章11-17節/暗唱聖句: 詩篇139:8-10節 (Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！新年明けましておめでとうございます！

願わくは、新年にもみなさんご家庭の上に神の豊かな祝福と恵みを、コロナ禍が続く中でも今年一年中にも格別な神の御守りを切にお祈り致します！このエステル記はイスラエルの民がバビロンの捕虜期間中であつた出来事が記録された聖書です。バビロンの捕虜に行ったユダヤ人たちは70年が過ぎた後、当時新生王国であるペルシアの王クロスの勅令(ちよくれい)によって本国イスラエルに戻ることになります。それで紀元前536年ヨシュアとゼルバベルの指導によって本国イスラエルに戻り、崩れた神の神殿を建て直します。そして、それから約80年が過ぎた紀元前458年には、第2次のイスラエルへの帰還が行われます。その時の指導者が聖書エズラ記のエズラでした。そして14年後、焼き尽くされたエルサレムの城壁を再建するため、ネヘミヤの導きによって第3次のイスラエルへの帰還があつたわけでありませう。

今日のエステル記は第一次帰還と第二次帰還の間、つまり、紀元前487年から465年の間にあつた出来事です。このエステル記では、イスラエルに戻ることができず、ペルシアのバビロン地域に残されていたイスラエルの民に対して知る事ができます。小説のようなドラマチックなエステル記ですが、確かに歴史的事実であつた事を裏付ける記録と考古学(こうこがく)的証拠、当時の制度や慣習などがこれらのすべてを証明してくれます。(参考、聖書の題目が女性の名前でできている聖書は異邦の女であつたルツによる内容のルツ記とユダヤ人の女であるエステルに関するエステル記二つだけです。)

<エステル記の内容>

エステル記の内容はペルシア帝国のアハシュエロス王の時の実話の内容です。

1章1節によるとペルシアの王アハシュエロス(Ahasuerus)が出ていますが、一般の歴史の本に出てくるクセルクセス(Xerxes)1世(486-465BC)です。アハシュエロスはヘブル語でクセルクセスと言われますが、ギリシャ語からの英語式表記です。ペルシアのアハシュエロス王はクロス王(550-530BC)、カンビセス王(530-522BC)、ダリウス王(522-486BC)に続くペルシア帝国の四代王として、紀元前486-465年、約21年間統治していたペルシアの最高の権力を握っていた王でした！彼はアジアのインドまでと、パキスタンからアフリカのエチオピアとスーダンまで世界の127州の広い地域を治めていた王として知られています。

世界を治めながら、最高の権力を握っていたこのアハシュエロス王がある日、大きな宴会を催(もよお)して、すべての家臣たちのまえで、王妃ワシュティの美しさを見せるために、宴会に出るようにと命じました。ところが、王妃ワシュティは王の命令に拒んで宴会に参加するのを断ります！当時の絶対権力をもっていたアハシュエロス王は宴会に参加した多くの人々の前で困ってしまいます。怒りで燃え上がっていた王は、即ワシュティを廃位(はいい)させて、新しい王妃を公に探すように命じます。

今日でいうと全国的美人大会が開かれ、その中で神を信じていた捕虜出身イスラエルのユダヤ人の処女であつたエステルが選ばれます。王妃ワシュティが廃位されてから、4年ぶりにペルシア人ではない捕虜身分のイスラエルの女エステルが奇跡的な神の深い摂理と恵みによって、ペルシア帝国の王妃となつたわけですね！エステルは親がいなかつたので、おじであつたモルデカイによって育てられた女でした。

さて、ペルシアの王の次の身分、総理だつた人、ハマンはユダヤ人たちをとつても嫌っていました。ハマンはペルシア帝国の第二人者でした。彼が町を通ると、すべての人が彼にひざをかがめてひれ伏していましたが、唯一城門(じよ

うもん)を守る家来に過ぎなかったモルデカイだけが、彼にひざをかがめず、ひれ伏さなかったのです(エステル 3:2-4)。なぜ、どうして、モルデカイだけが総理であるハマンにひれ伏さなかったとすると、モルデカイはイスラエルのベニヤミン族のサウル王の子孫(サムエル記第一15:7-9)でしたが、ハマンという人物はイスラエルの長い敵だったアマレック王アガグの子孫(エステル 3:10)だったからです。

一介(いっかい)低い身分のように見えるモルデカイが自分にひれ伏さなかったことに腹を立てたハマンは、モルデカイについて調べた結果、彼が何とイスラエルの捕虜出身のユダヤ人であることが分かりました！そういうわけで、彼はさらに憤りを爆発し、モルデカイだけではなく、すべてのイスラエルのユダヤ民族を根絶やしにし、抹殺しようと陰謀を企(くわだ)てます(エステル 3:6)。そして、イスラエル人たちを虐殺する日として 12 月に該当するアダルの月の 13 日、つまり、12 月 13 日という日にちまで決めておきました(3:7)。

12月13日！ハマンは王の許可までいただいて、一瀉千里(いっしゃせんり)に決め片付けようとしています。

すべてのユダヤ人たちを虐殺日として、施行する文章がすべての民族に公示(こうし)されました。**エステル記3章13節**によると「**書簡(しょかん)は急使(きゅうし)によって王のすべての州(しゅう)へ送られた。それには、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日の一日のうちに、若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財(かざい)をかすめ奪えとあった。**」と命じました。

12月13日！イスラエルの全ユダヤ人たちを殺そうとする虐殺の陰謀は、ユダヤ人たちにとっては絶対絶命(ぜったいぜつめい)の危機一発でした！ペルシア帝国に残されているすべてのユダヤ人たちは大きな悲しみの中で断食、荒布(あらぬの)を着て灰の上に座っている人が多くありました(4:3)。モルデカイは事態の深刻性を察して、すぐさま王妃になったエステルにこの問題を解決出来る王に出て、この問題を解決してもらうようにと要請します。

しかし、これは決して簡単なことではありません。なぜなら、当時王宮(おうきゅう)の法として、王の身を守るために、そして王としての威厳を立たせるために、王からの呼び出しなしに王の前に出ることは死刑に値する重罪(じゅうざい)を犯すことになったからです。

ですから、王の許可なしに、王に会いに行くことは王を殺そうとするのか、謀反(むほん)をたくらむ行為としてみなされ、すぐ処刑を受ける行為にあたりました。その当時、エステルも当然この王宮の法をよく知っていたはずですし、王に30日間も呼び出されなかった時期だったのに、王の許可なしで、自分から先に王に行くこと自体が王妃の地位から下ろされることだけではなく、自身のいのちまで脅かされることだったのではありませんか。

それにもかかわらず、“あなたが神様の恵みで王妃になったのは、神様の民を救う今の時のためではないか？”というモルデカイの切なる忠告(ちゅうこく)を聞いて、王妃エステルは**4章16節に、「私は王のところへ参ります。私は、死ななければならぬのでしたら、死にます。」**という覚悟で王に出て行こうとします。それが先ほど読んだ本文の内容です。

イスラエルの民は三日間エステルのために断食しながら神様に祈ります！そして、エステル自身も、まず、三日間神様に断食の祈りをささげます！そして、王のご好意を受けるために、美しく、飾って、しかも、王の許可なしに王の前に行きます。“死ななければならぬのでしたら、死にます！”という神様への絶対信仰の覚悟で王の前に行ったのです。(愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！**この順序をよく覚えて下さい。危機の瞬間、まず神様の御前で断食しながら切に神様の助けを求めた後、人のやれる限り最善を尽くします、そして、その後のすべての結果は神様にゆだねる姿勢と生き方！これこそ、絶対信仰に生きる生き方ではないでしょうか！**)

じゃ、その結果どうなったのでしょうか？意外とアハシュエロス王はエステルを見て、喜んで金のしゃくを差し伸ばして迎えます。これに力を得たエステルは二日間宴会を開いて、王と総理であったハマンを招待しました。宴会の始め

の日に王妃から王様と自分が一緒に招待され、宴会を終え王宮を出るハマンにとっては何の恐れも、怖いものなんか何もなかったはずでしょう。なのに、またモルデカイが自分にお辞儀(じぎ)もせず、恐れていないのを見て憤りに満ちて、まず、モルデカイを処刑するために高く木の柱を立てさせます。

その日の夜、喜んだ王は不思議に眠れなかったので、記録の書である年代記(ねんだいき)を読ませました。ところが、その中で、以前モルデカイが王を殺そうとする陰謀を知って、通報したことで、王が殺される事から免れ、守られた事が分りました。それにもかかわらず、そのモルデカイに何の報いがなかった事を気づいた王はすぐ総理ハマンを呼びました。王はモルデカイだとは言わず、特別に王からの栄誉を与えたい人にはどうすればいいのかと、聞きます。総理ハマンは間違いなくそれは自分のことだと勘違いして、栄誉を与えたい者に、王服を着させ、その人を馬に乗せて、町の広場に導かせ、その前で王に栄誉を受けたものだとふれさせるようにと提案します。王はハマンが言ったとおりに、後モルデカイにそうするようにと命じます。ハマンによって柱に掛けられて死にそうになったモルデカイが王からの栄誉を受けて、すばらしい待遇を受けることになりました。

宴会の二日目の日、エステルは王とハマンをまた招待します。王妃エステルによって嬉しくなった王はエステルに何がほしいのか尋ねます。王は王国の半分でもかなえてやろうと言います。この時、エステルはその場にいるハマンのユダヤ人虐殺陰謀を明かし、自分の民族を救ってくれるようにと訴えます。王はこれを聞いて、憤って、宴会場を出てしまいます。その瞬間、真っ青(さお)になったハマンは居(い)残って、エステルに命ごいをするためにひれ伏しながら、しつこく頼むハマンの姿を見て、戻って来た王は、ハマンが王妃に乱暴しようとするのだと思い込み、さらに王は憤って、ハマンを処刑にさせました。

結局モルデカイを殺そうと用意しておいたその木の柱にハマンがかけられ処刑され、そのハマンの代わりにモルデカイをペルシアの総理にさせます。そして、イスラエルの民はみな虐殺の危機からみんな救い出されたという内容がエステル全体の内容です。

何の力もなく、どうしようもできない危機と窮地に陥られていた神の民をそのままおかせないで、予め、この時のために備えておいた少数(しょうすう)の神様の人々をとおして、驚くほど大逆転の勝利で神様が救ってくださったのです！イスラエルの民はその救われた日を「プリム」という日を定めて、代々、この日を覚えて守るようになります。これがエステル記の内容全てです。

<エステル記を通して教えられる教訓>

①神を信じるご自分の民に必ず神様の御救いと御守りが伴われることです。

エステル記では、神様の御名が一度も出ていませんが、どんな時にもご自分の民をほったらかせないで、見捨てないで、顧みて下さる神様の御守りと御救いについては証されています。それは、旧約聖書で全体的に流れ、教えられている神のメッセージです！

兄たちによって見知らぬところに身を売られて行ったヨセフを、ポティファルの妻の誘惑を拒んだことで、また13年間牢に入れ、絶望のどん底の状況においても、神様は彼を顧み、彼を御守り、生かし、ヨセフを通して飢饉の危機からエジプトだけではなく、イスラエルの全民族を救い出して下さるように導いて下さいました！

出エジプトの出来事もエジプトで430年間の長い奴隷生活の苦しみと絶望の中で終わりそうになっていたイスラエルの民を救い出し、養って下さる神様の御業の大旅程(りよてい)が表されています。それだけではなく、イスラエルの民の不従順と偶像崇拜によって、他国に70年間捕虜として捕えられて行った時も、ご自分を信じる民を帰還させたり、今日の本文のようにペルシアに残されていた者たちさえも、集団抹殺されるの危機から、神様はまたご自分の民を守ってくださったのです。

神様は歴史において危機のあるたびにご自分の民を守って下さいました。日本も世界歴史においても見出せない

ほど300年近く、キリスト教の迫害の歴史の中で、キリスト教が完全に根絶やしにさせようと必死でしたが、その絶望と苦しみの中でも、神は信仰の人々を守り、顧みてくださって、いま私たちがこんなに信仰の自由の中神様に礼拝をささげるようになっているのではありませんか？**神様を信じ、謙遜に神の御言葉通りに、御心通りに従おうとする我らをも今年一年中どんな時にも見放さないで、見捨てないで、いつも顧み、見守り、救ってくださいます！**
いつだって愛してるよと神を愛し、従う我らにずっと語り続けて下さっています！！

エステル記は死にそうな状況においても、御約束通り、神の子どもたちを、信仰の民を守ってくださるその神様が昔も、昨年も、いまも、今年これからも変わることなく、我らの人生すべてを治めておられるお方であることを聖書は教えて下さっています。**エステル記では神様の名前は一回も出ていませんが、それにもかかわらず、エステル記を読んでいくうちに、“見えないところにご自分の民といつも共におられ、生きておられる神様”を鮮明に表してくれま**
す。エルサレムを離れ、遠い異国の地でたとい捨てられたかのような捕虜の生活だとしても、神様は一度も話さずご自分の民を守り導いて下さいました！その神様が今も、今年の一年も必ず我々を守って下さっています。我々がどこにいても、どんなに苦しい状況に置かれても、人の力では希望がなさそうな瞬間でさえも神様は我々とともに
おられます。

②神様は我らだけではなく、宇宙的主権と統治をされるお方です。

創世記、出エジプト記から始まる旧約の聖書、そしてエステル記では神様を信じてない民だとしても関係なく、神様の民たちの問題を解決するようにと用いて下さいます。エステル記においても神を知らなかった、ペルシアの王アハシュエロスもそうではありませんか？

我らが信じている神様は信じる民の中だけ働かれる制限させる神様では決してありません！すべての民族と全世界に、全人類の歴史においても治めておられる神様の主権を我々は信じ、覚えなければなりません。神様に従わず、罪を犯したイスラエルの民を回りに国々を用いて懲らしめる時もあり、ペルシアのクロス王をとおして、イスラエルユダ民族の帰還と解放を宣布させられるように用いる時もあり、今日アハシュエロス王をとおしてイスラエルの集団虐殺の危機から神様の民を救い出させてくださる時もあります。

愛する信仰の家族のみなさん！これらのすべてが偶然や運が良くて起こったことでしょうか？生きておられる神様の絶対主権のもとで、神様のご計画にしたがって起こったではありませんか。我々が経験するすべてにたまたま、偶然とかはありません。神様は今日も我々の人生においても介入しておられ、どこに行っても神様はそこにおられます。神様は神の信じる人だけの神ではなく、この世すべてを造られた宇宙の創造主の神様です。そういうわけでダビデはこのように告白します。

「(主は)たとえ私が天に上(のぼ)っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床(とこ)を設(もう)けても、そこにあなたはおられます。私が暁(あかつき)の翼をかって、海の果てに住んでも、そこでもあなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕らえます。(詩篇 139:8-10)」

今年も、我らの全ての家族、教会の中だけではなく、関わっている社会、会社の人々や環境、学校での生活、すべての環境においても、神様はすべてをそこにもおられ、すべてを治めておられるお方であることを忘れないで下さい。ですから、新年にも、教会にいる時だけでなく、学校で、職場で、関わる全ての人間関係においても、すべてを治めておられる神様が御心のうちに、我らを助け、支えて下さるように祈りつつ、委ねて生きたいと願います。

③人の計画と意図が決して神様の御心とご計画よりまさることはないことです。

ハマンはモルデカイを殺そうとし、それだけでも足りなくて、ユダヤ民族を根絶やししようとしたましたが、人間の計画を立てていたとしてもかなえられませんでした！彼はモルデカイを木の柱にかけて殺そうとしたましたが、まさに自分
がかけられるとは思いませんでした。そして、モルデカイと王妃エステルがどんな素晴らしい計画を立て

て死ぬ覚悟と決断をしたとしても、神様への絶対信仰を持って祈り求めながら神様に委ねられなかったなら、エステルやモルデカイも殺される運命ではありませんでしたか？

**しかし、結局、人の願い通りではなく、神様のご計画、御心通り、すべてが成され、導かれたことが分かります！
ですから、我らの人生に偶然とか、たまたまだけではなく、もう決まっているかのような運命論もありません！
神の御手により、人の運命も変わり、人生もいくらでも逆転されたのではありませんか？**

人間の計画と意図は決して神様の先にはなりません。人がどんな願いも、計画でも、ついに神様のご自分の計画の中で働かれます！エステル記では一度も神様の名前が出ていませんが、結局、人間の思い、人間の背後で働き、成して下さる神様がおられることを見ることができます。最後にエステル記を通して、人は諦めたとしても、諦めずともにおられ続けられる神様の救いの御業を見ることができました！！

最後に、神様の御救いを覚え、感謝するプリムという新しい日が定められます(エステル 9:20-10:3)。

この日はエジプトから救い出された過ぎ越しの祭りのように、こんにちもイスラエルで、人々は記念して神様の救いを思い出して感謝を捧げています！イエス・キリストを信じることによって救われた我々はどんなに神様の救いを覚えて感謝と喜びをささげ、喜んでいるのでしょうか？何の力も、先の希望が見えなかった捕虜の身分でしたが、神様を愛し、神様に望みと信仰を持ち続け従っていた神の民を、危機と苦しみと死の絶望におかれている状況から救い出してくださる神様の救いはエステル時代だけではなく、今我らの人生の中にも続けられています！

4章16節に「私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」このエステルの決断は“もう死んじゃえば良いのか”見たいに、どうしようもできない自分の人生をあきらめている内容では決してありません！

“死ぬ覚悟でやればできない事はあるだろうか。”と世間の人々はただ自分の志とか覚悟程度で何でも出来ると言われますが、そのような言葉やプレッシャーによって、実際多くの人々がどうしようもできない時に、自分のいのちを諦めてしまったのではありませんか。

王妃エステルの「私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」という言葉と決心は、彼女の決断と意志を立たせ、訴えている話ではありません。**この言葉は神様への絶対信仰の志と決断であります！救い主の神様が今も、これからも絶対に見守ってくださる事を信じ、ゆだね切っていた絶対信仰による告白であり、信仰の決断でした。**我々の目には見えませんが、いまもなお我らと共におられ、神様は必ず、今の状況と問題すべてから我々を守り、救い出し、導いて下されるお方である絶対信仰がなければ、このような告白は出来ないのではありませんか。愛する信仰の家族のみなさんは救いの神様のみが今年も、これからも、我々を守り、様々な危機と戦いの中においても我々の全領域を治め、救い出し、働いておられる事を信じて進み行きましょう。

“死ななければならないのなら、死にます。”という絶対信仰をもう一度しっかり保つことが出来るように祈ります。もう新しい新年が始まり、今日からから新年1月の初の主日が始まりました！願わくは、神様の御守り、神様の統治、エステルように、死ななければならないのなら、死にます！という神様への絶対信仰と信仰の勇気を持って、神の救いを成して行かれる尊い働きに大いに用いられて行くクリスチャンプレイズチャーチの全信仰の家族となりますよう主イエス・キリストの御名によって祝福します。アーメン！

